

はじめに

私がこのテーマにしたのは生まれた町である伊仙町に図書館がないという現実を知ったことがきっかけである。伊仙町は奄美大島郡徳之島のなかの町である。その島には徳之島町、天城町、伊仙町の三町からなる島である。伊仙町を除く他の二町には図書館があるのに、伊仙町だけないという現実である。この一つの事実に疑問を抱いたのである。「なぜ伊仙町には図書館ができないのか」「図書館建設の予定は」の質問を投げかけるうちに、行政の住民側に立ったサービスを考えていない姿勢というものに疑問を抱いてきた。行政の動きをその場でじっと見ているだけでは何も変わらないのだ。今ある伊仙町の財源、人材を活用して図書環境の充実を図ることはできないのだろうか。

そこで、図書館という箱モノを作るのではなく、ソフト面から見ていこうと思う。今回の卒論では、伊仙町ならではの図書環境づくりというものを考えていきたい。

そこで伊仙町の図書環境の充実が、若者人口流出を防ぐもの、また娯楽施設のない伊仙町に楽しみを与えるもの、教育に貢献するものであることを期待しながら進めていきたい。以下一章では、現在の日本の図書環境、伊仙町の行政事情、図書環境について述べていく。二章では伊仙町の現状を踏まえ、今できる限りの図書環境作りを考えていきたい。三章では栃木県内で活躍されているグループを取りあげる。最後にではこれまで調査してきた事を踏まえ、まとめたいと思う。

第一章 現在の図書環境

第一節 現在の日本の図書環境

「生涯学習、世論調査」(総理府、1992年)によると、社会教育、文化施設の中で、「図書館建設」を求める声が26%と最も高かった。また、埼玉県岩槻市の住民調査では、図書館利用が及ぼす効果について調査している(複数回答)。結果は、「仕事や勉強の役に立った」48%、「有意義な時間を過ごすことができた」37%、「視野が広がり、話題が増えた」20%、「生活にはりあいができた」8%、「仲間や友達が増えた」5%、「資格や免許が取れたり、試験に受かった」3%などである。¹特定の知識の増加といった限られた効果だけではなく、それが生活上に様々な良い影響を与えていることが分かる。図書館を利用して、本を読み、知識や情報を得ることによって、仕事、勉強が向上し、自分の視野が広がり、生活に対する積極的な態度を持つことができるということだ。これは個人の生活、ひいては地域社会を活性化させていると言えるだろう。

では、図書館の建設予算はどのようになっているのか。予算確保の方法は市町村によって様々だが、多くは補助金(補助金制度があった頃)、市町村の自主財源、起債(国からの借金)等の利用である。²

以前は図書館への国の補助(図書館建設費補助)というものがあつた。これが近年の行政改革の下、次第に縮小され、1997年、図書館法改正により図書館への補助金制度がなくなつてしまった。それ以前は、国の「公立社会教育施設整備費補助金」があり、多くの図書館や公民館の建設に活用された。以前はブームだつた図書館建設も今では陰が見えていけると言える。そのブームに乗つて建設しなかつた自治体は「補助金制度の廃止」により、建設がしにくい状況となつたわけだ。

その一方で図書館はその自治体の特徴の一つと言わんばかりに個性ある図書館作り、更なるサービスの向上を目指し、各自治体の図書館は取り組んでいる。宇都宮市立図書館、宇都宮市立東図書館では、広域利用を中心として様々なサービスに取り組んでいる。また、栃木県立図書館でも、県内の図書館の仲介役というべく「協力車」を走らせている。それは、例えば、A市になかつた蔵書を県立図書館がファックスで県内の図書館に情報を流し、もしB市にあれば、B市からA市まで運んでくれるというものである。広域行政が叫ばれる中、こうしたサービスはむしろ「あつて当たり前サービス」になっているとさえ言える。国の補助金制度は廃止されてしまつたが、各市町村図書館は新たなサービスへ向け

¹ 「図書館はなぜ必要か」『知の銀河系一』(図書館情報大学、1998年) pp139 - 140.

² 鹿児島県教育庁社会教育課学習情報係社会教育主事花月敏郎氏への2002年、12月16日のメールでの聞き取り調査から。

て取り組んでいる。

第二節 伊仙町の現状

伊仙町が全く図書館がないというわけではない。というのは中央公民館に属する図書室は存在している。しかし、それは図書館環境が充実しているとは言い難いものである。わずか37,4平方メートルの狭い空間の中に、蔵書冊数わずか一万冊というものである。一般閲覧室の他に部屋はなく、テーブルが一つに職員の机が一つという状況である。自習したくても、そういう部屋は確保されていない。かなり以前から町民の「図書館建設」要請は出ていた。しかし、実際は何も手をつけてこなかったのが現状である。全く充実していない図書室を反映してか、利用者も徳之島三町の中で最も悪い。年間利用者数を比べると徳之島町が12600人(人口は13640人)なのに対して、伊仙町はわずか1000人(人口7700人)である。³図書館建設の要望は以前から強いという事を考えると、単に伊仙町民の読書離れだとは言にくい。

また、図書室職員の方も、元水道局職員の方で、いわゆる専門司書⁴は配置されていない。だが、伊仙町には町内八つの小学校、三つの中学校の図書室には各校1人ずつ専門司書が配属されている。これは全国的に見ても珍しい事例だろう。というのは、学校図書館に専任の司書を置くことが義務付けられるのは来年、2003年の4月からなのだ。1997年の段階で学校図書室に専任司書を置いている学校は全国小中高で平均設置率はわずか14.1%というのが現状である。これには複雑な背景があり、1953年に学校図書館法で「司書の専任」を義務付けたのだが、と同時に「当分の間、置かないこともできる」と猶予規定を設けたのだ。そこで学校図書室に専任の図書司書を置く学校は一向に増えなかったのだ。このように学校の司書という面から見ると、伊仙町は全国に先駆けていると言える。しかしここで問題なのは伊仙町の公立図書館をめぐる図書環境である。

このような現状の中、どうして伊仙町に図書館ができなかったのか。まず考えられるのは「図書館への補助金制度の廃止」であろう。それは伊仙町行政職員のインタビューの回答にも表れていた。「今、伊仙町に図書館ができない最大の理由は、国の行政改革の影響を受け、補助金がおりにないのだ。今年も作ろうと毎年予算に入れているのだが、その度、補助金はおりにこないというのが現状です」。⁵彼の発言通り、伊仙町のみでなく、図書館を持たない全国の市町村(主に町村)も大きな影響を受けていると考えられる。

では、なぜ国の補助金制度がある時に伊仙町は図書館を建設してこなかったのだろうか。

³ 徳之島町立図書館長への2002年8月27日のインタビューから。

⁴ 「司書」とは図書館・図書室・資料室などの図書関連施設で資料と利用者とを結びつけることを主な任務とする職業をなりわいとする人たちのことをいう。主な仕事は、図書館の利用者と図書館に所蔵されている資料とを有機的に結びつける事である。

⁵ 伊仙町公民館付属図書室長前田忠男氏への2002年8月27日のインタビューから。

これは町長の権限が大きな影響を与えていると考える。今までの伊仙町の行政が図書館という文化面に關心があまりなく、道路建設に重みを置いていた。実際現町長になって「図書館建設」の話があがってきている。しかし実際は、以前の行政側の資料を調べても図書館建設の文字は出て来ない。現町長へのインタビュー(2002年8月22日)に試みた。

「本を読むという事はとても大切である。更に図書館建設について考える必要がある」と言う。図書館の必要性を語りながらも、施政方針には全く図書館建設の記事は書かれていなかったという現状である。これは概要なので、全てを記載するのは難しい。だが町民に行政の意向を伝える意味でも記載する必要があるだろう。と同時にこれは伊仙町の図書館建設がいかに程遠い計画である事を示唆しているようにも感じる。町長が図書館の大切さを本当に感じているのか、これが図書館建設において重要な事の一つであろう。

また、伊仙町中央公民館図書室長へのインタビュー(2002年8月27日)によると、「図書館建設の未来は」という質問に対して「本当は今年作ろうとした。しかし駄目になった。というのは図書館建設予定地の元伊仙町診療所が三千万円の赤字を抱えている。これを返済するまで建設は無理だろう。しかし来年くらい、近いうちにはできるだろう」⁶との事だった。伊仙町の図書館建設を遠ざけているものの一つとしてこの「元町立診療所の赤字問題」が浮上してきた。この診療所は現在、休診中ということになっているのだが(実際はやめているの同然、実際鍵もかけている)規則により、赤字が返済できるまで、また休診中は他のものに使う事を制限されているのだそう。よって少ない予算を使い、活用しようにも改築できないという現状である。

最後に伊仙町総務課の職員へのインタビュー(2002年8月22日)によると、「五年後、十年後も難しいだろう。現農業試験場での建設計画はあるが(旧試験場跡地利用計画の中で図書館が一事業として位置付けられている。事業費約1億3000万円、2008年予定、RC造平屋建823、2㎡)伊仙町役場企画課職員の方のお話によると、これは単に青写真にすぎない」と言っていた。つまり土地確保のための県への書類提出用なのだ。

以上のように、様々な原因、背景が重なり、伊仙町に図書館が建設されてこなかった、またこれからも難しいということが分かった。伊仙町民が充実した図書環境を手に入れるのは今すぐには期待できないというわけだ。「図書環境充実」を行政側、図書室関係者にのみ頼っていてはいけないということである。いずれにしても、今伊仙町ができる最大の図書環境の充実策はないかをこれから探っていきたいと思う。

⁶ 伊仙町社会福祉教育課時孝氏への2002年8月17日のインタビューから。

第二章 伊仙町の現状を踏まえた図書環境づくり

第一節 図書室 内側 からの視点

(1) 移動図書館車の巡回委託

鹿児島県奄美大島郡徳之島天城町（天城町では、衛星中継、ケーブルテレビを使い、本の読み聞かせを行っている。また月一回成人読書会も行っており、人口規模から見て小さな図書館にしては充実した図書環境だと言える。親子読み聞かせはもちろん保健福祉センターや老人ホームへ出向いたりもしている。全て図書館の職員が行うのは大変な為、ボランティアをお願いしてやってもらっている）

徳之島町立図書館は移動図書館車を所有している。そのどちらかまたは両方に協力してもらい、伊仙町にも巡回してもらうのはどうだろうか。徳之島町立図書館では、月約20回、つまりほぼ毎日巡回している。巡回ポイントとしては「母間小学校」「徳和瀬老人憩いの家」「前川公民館」など学校や集落地などである。伊仙町には図書館は周知の通り、移動図書館車もない。

伊仙町中央公民館前田さんの話によると（2002年8月27日）本当は今年（2002年度）伊仙町は移動図書館車を購入する予定だったそうだ。しかし、予算が下りなかったため、あえなく中止になった。車の購入費は約1200万円である。伊仙町立診療所の借金を3000万円抱えている伊仙町としては当然のことであろう。また、移動図書館車のみ購入しても無駄である。本がなければ移動する意味もない上に実施に対しての効果も考えられない。移動図書館車購入費用を本の購入費用に当てた方が賢明と考える。

つまり伊仙町の財源を使って、二町またはどちらかの町に委託という形をお願いしてはどうか。しかし、実際、伊仙町役場、徳之島町役場それぞれの社会教育課の職員の話によると（2002年8月17日）両者共通して「不可能である」との事だった。伊仙町の職員によると、予算上の問題や三町合併問題を調整中であり、（現在、徳之島は全三町の合併問題を町民らにアンケートを取っている段階まできており、かなり近い形で実現するであろう）無理だろうとのことだった。しかし、私が思うに現在は無理でも、もし合併が実現されれば移動図書館車も三町共同の財産になるので、実現可能になると考える。徳之島町役場職員の話（2002年8月22日）によると、「私的な考えなのですが、徳之島町の町民の物なのでできないと思います。財源をもらってという事でしたが、伊仙町としても、そういうふうに負担するのであれば館を作ると思います。三町合併とかになれば別でしょうがこれも各町の町民が判断することですので。」とのことだ。また、鹿児島県教育庁社会教育課学習情報係社会教育主事 花月敏郎氏に同じ質問をしたところ、「市町村間の広域連携のことになるかと思いますが、関係市町村間の協議次第と考えます」と述べていた。つまり移動図書館の協力体制を築くのは全く不可能というわけではない。三町の協議によってそのシステムを作る事は可能なのだ。伊仙町職員は「予算がないから協力

してもらふ事も無理だろう」と言っていたが、「事例がない事をする事に躊躇っている」とも感じられる。行政はもっと住民の立場になって考えてみる必要があるだろうか。町民にアンケートを取るなどしてもっと民意に沿って図書サービスというものを考える必要があるだろう。そうすれば、行政側からは見えなかった意見・アイデアが、自ずから出てくるだろう。

では、移動図書館車が不可能ならば、県に協力車を巡回させるのはどうだろうか。私の言う「町同士の協力」とは少し異なるが、栃木県立図書館がやっている事業を紹介しよう。栃木県立図書館では「協力車」という車を所有しており、県内を巡回している。例えば、塩原町民が、借りたい本が塩原町立図書館になれば、図書館にリクエストする。すると塩原町立図書館は栃木県立図書館にファックスを流し、県立図書館にあれば、県立図書館が、もし県立図書館になれば、県内全ての図書館にファックスを流し、本があるかないかを確認してもらうのだ。もし宇都宮市立図書館にあれば、そこから塩原町立図書館に運ばれ、利用者の元に届く。そこにタイムラグは生じるが、電車で一時間近くかけて宇都宮市まで来る手間は省けるというわけだ。

そこで、鹿児島県立図書館が県の財源を使い、巡回車を徳之島町全域を回る形でできないものか。もしこれが可能になれば、伊仙町民は、町内にいながら読みたい本を探し、図書室に要請すれば巡回車が伊仙町まで運んでくれる。始めは予算に比べ、利用者数、効果は少ないと思うが、三町同時に「本を読む」ことを促進させれば、相乗効果になるのではないか。

実際、巡回車とは異なるが、現在伊仙町図書室でも、鹿児島県立奄美分館からの本の依頼はやっているそうだ。つまり、伊仙町図書室にない本があれば(ほとんどないと思うが)、図書室に要請し、そこから奄美分館に依頼すれば、借りたい本が町民の元に届く。だがこの場合、手元に届くまでに一、二週間のタイムラグが生じる。もう少し時間を縮めたいところだが、分館から依頼する利用者が伊仙町図書室利用者の1%にも満たない状況なので難しいと考える。しかし実際、このサービス自体を知らない町民も多いと感じる。町民がこのシステムを知り、頻繁に利用するようになれば時間的な差の解消と共に、奄美分館の利用増大が伊仙町の図書環境に何らかの影響を及ぼすと感じる。

(2) 伊仙町図書室からの二町の蔵書検索

『平成13年度奄美の読書施設』(鹿児島県立図書館奄美分館発行)によると、伊仙町は蔵書冊数はもちろん、住民1人当たり貸し出し冊数0.21と二番目に低い。

そこで伊仙町民の読書促進、また図書室利用促進を含めた二町の蔵書を町民にアピールする事を提案したい。つまり「検索システム」を置くのだ。現在、伊仙町中央公民館図書室の主な利用者は学童がほとんどである。そこで中高生や成人にも利用を促すことが、望ましいと考える。アピールする方法としてはまず、伊仙町役場のホームページに図書室専

用のページを設け、そこに掲載するのだ。たまたまホームページを見た人にとっても、パソコン利用者にとっても家にいながら二町の図書館の検索、閲覧が出来ることは大変便利だと考える。

次に紙媒体を通してのアピールである。役場、人の集まる商店の協力の下、紙を置いてもらう。新刊の本が届く度に更新しては経費がかさむので新刊のみを月に一回更新すればいいのではないか。町民は見たい本、探している本をそこに行ってみつけることができる(図書館に近い所に住む町民はそこで済ませられる。)もし、本が見つければ、二町に通勤、通学している町民は直接二町の図書館に行けば良い。そうでない不便な町民は二町との協力体制の下(1)でも述べたが移動図書館を伊仙町にも巡回して運んで来てもらう)伊仙町図書室まで持って来てもらう。その際、問い合わせに対応し、伊仙町図書室まで届く経路として三町が図書室開館日数6日を交替し、週に2回負担することになる。広域行政が叫ばれ、また全国各市町村が様々な図書サービスを取り入れていく中、検索システムさえない伊仙町行政はかなり遅れていると言っても過言ではない。例えば、栃木県における宇都宮市、鹿沼市、今市市、真岡市、上三川市、南河内町、上河内町、河内町、西方町、栗野町、二宮町、芳賀町、壬生町、石橋町、氏家町及び高根沢町の4市12町は、公立図書館及びこれに準ずる施設の広域利用を協定する事例もある。⁷この協定は平成8年から施行されたが、今も住民の多くに利用されている。この場合、壬生町の住民がその図書館にない本があり、協定の下、本を要請することはできるが、壬生町まで届けられるわけではない。だが、この場合、県立図書館の「協力車」サービスで壬生町まで持って来てもらうこともできる。

伊仙町にはこうした「広域行政」サービスがまだ整っていないと感じる。行政はもっと、住民のニーズに耳を傾け、今あるサービスのみで満足してはいけない。と同時に伊仙町民も「図書環境アップ」のニーズをもっと行政側にも訴える必要もあるだろう。

(3) 人材の活用

普通、図書館は専門の図書館司書がやる。しかし、伊仙町では事情が異なる。伊仙町中公民館図書室では元水道局職員が事務処理等を行っている。メディアなど度々取り上げられているが、伊仙町は選挙の度に町役場周辺で暴動が起きる程、選挙熱がすごい。そういった背景の中、町役場の異動もその度に行われるので図書とは全く関係のない職員が図書室長になっているのかもしれない。だが、原因はそれだけではないと感じる。図書司書を雇用する人件費も関わっているのだろう。図書室、つまり社会教育に費用を当てるだけ予算に余裕がない。または伊仙町行政側が図書環境についてあまり関心がない為に、わざわざ図書室に専門図書を置くまでもないと考えているのだろう。だがこれでは本を読みたい町

⁷宇都宮市「栃木県央4誌12町公立図書館等の広域利用に関する協定書」『宇都宮市図書館概要』(宇都宮市、2002年)p63

民のニーズに対応できていないことになる。彼らのニーズに応えるには専門の司書を配置する必要があるだろう。まず思いつくのは単純に司書を雇い、図書室に配属する事である。だが、若者の島離れが進んできている事を考えると、鹿児島本島から徳之島への転勤を希望する人はまず少ないと考えて良い。また島内の司書も徳之島町立図書館、天城町立図書館合わせて三人と少ない。新たな職員を雇うのは困難だと考える。

よって、伊仙町内の小中学校の図書司書職員を活用してはどうだろうか。先述したが、伊仙町は全国的にも珍しく町内各小中学校に一人の専門の図書司書が配属されている。町内で合わせて11人の司書が学校図書室で働いている。シフト制で、彼らを活用するのだ。11人で約24～26日回すので、月2.3回の割合である。伊仙町はそう大きくないので移動ということを考えてもそう大変な事ではない。その際、行政側と彼女らが「伊仙町の図書環境」について話し合う場を作ることが必要だろう。行政が一方向的に義務付けてしまふのでは長く続かないだろう。

また、本の好きな人に呼びかけ「図書ボランティア」として働いてもらう。図書司書に比べ素人だが、本に興味のない人が図書業務をやるよりは良いと考える。そこから様々なイベント等も生まれてくるに違いない。また、退職された学校の先生らを活用するのはどうだろうか。現役時代の給与を支払えないにせよ、教育熱心な彼らを活用するのは有効的な方法ではないだろうか。本をアピールできれば伊仙町民の読書熱増大にもつながるのではないか。町民へのニーズにも少なくとも今よりは対応できると言える。図書環境の充実に伴い、伊仙町の人材活用にも繋がるであろう。

同時に伊仙町図書室の蔵書の増大も考える必要があるだろう。現在、伊仙町の蔵書数は奄美群島の中で最も少ない。それにも関わらず一向に図書環境は改善されていない。よって、図書室が町民から「本の寄贈」を呼びかける事を提案する。要らなくなった本、読み終わった本を回収し、図書室に置き、貸し出すのだ。リサイクルにもつながるといっても良いと考える。その際、伊仙町のホームページを通して呼びかけるのも一つの方法だと考える。伊仙町出身の方にもアピールするのだ。そこで行政に頼らず、自ら「手作りの図書館」を作ったボランティアグループを紹介しようと思う。⁸

昭和42(1967)年、当時都市近郊の農業地帯だった東京都東村山市に初めて出来た大型団地に、団地住民の手で子供のための図書館が誕生した。廃車になった西武鉄道の車両を利用した「くめがわ電車図書館」である。当時、東村山市に公立の図書館はなく、手作りの図書館だった。数は少なくとも良い本を読ませたいという母親たちの願いに地元の本屋さんが後払いで本を納入してくれ、母親たちは廃品回収をして本代を作った。電車図書館には子供たちがあふれ、大変な人気だった。とても市民の手に負える活動ではない。母親達は行政への働きかけを始める。

一方で、図書館の運営に必要な様々な仕事を分担して、大勢の人が参加できるようにし

⁸ 社会貢献支援財団 (http://www.fesco.or.jp/winner_h13_08.html) より引用

た。貸出係、読み聞かせ係、新聞係、読書会係、鍵係等、多いときには100人以上の大人が関わり、皆で電車図書館を支えてきた。

それから35年、電車図書館の活動には新しい世代も加わり休むことなく続いている本の貸出、読み聞かせを中心に、工作の会、人形劇、自然観察会等、活動は多彩である。地域の人たちの目や声の届く電車図書館は、本の魅力とともに、子供たちにはとても居心地の良い場所になっている。電車図書館からは、数千人の子供が育った。本職の図書館員になった人も、電車図書館の世話役になっている人もいる。お盆には「お父さんが通った図書館は電車なんだぞ」と子供を連れて帰ってくる人もいる。アメリカから図書館員が1年間、市民の図書館活動研究にやってきたこともあった。電車図書館は、子供達が育ちあう場であり、地域のコミュニティの核ともなっている。リーダーである川島さんは、この電車図書館の代表として大勢のボランティアが関わる組織の要として活動してこられた。

昭和49(1974)年、市民の運動が実って市立図書館が設置された際も、市民の代表として図書館の基本計画、条例づくりにも参画した。平成4(1992)年からの団地建て替えでは、古くからの住民が転居し電車図書館の存続が危ぶまれたが、プレハブで運営を続けながら粘り強く公団に働きかけ、今年4月新車両での再開を果たした。また、電車図書館の活動とは別に自宅の蔵書を開放し、近所の子供たちと読書を楽しむ。子供の読書に寄せる情熱と組織のリーダーとしての冷静な判断力とを兼ね備えた川島さんの存在により、30年以上に及ぶくめがわ電車図書館の活動は続いてきたと言える。

伊仙町も、自ら町民に呼びかけて、本の回収を試みてはどうか。図書購入費にあてる予算が少ないのなら、眠っている本をリサイクルし、町民に貸し出すのだ。伊仙町ホームページや町広報誌、中央公民館広報紙を使い、町民に募る。手間はかかるが自分の本が町民の役に立ち、自分自身もより多くの本を借りることができるので、図書購入費にかわって期待できるだろう。行政の財源のみに頼らず、自ら行動を起こすべきである。

(4)「町民の憩い、癒しの場」の図書室へ

現在の図書室は「倉庫」と言っても過言ではないほど「憩い、癒し」とは程遠い状態である。本棚が4つほど無機質にならべられ、本棚間の間隔も非常に狭いのでゆっくり楽しんで本を探すという状況ではない。また椅子が職員の方の机のすぐ目の前にあるので落ち着いて本を読むことができない。ではどうすればいいのか。私が調べたところ、伊仙町には町民がゆっくり休めることのできる場所がない。せめてひとつくらいはそういう施設があつていいと思うのだが、今の図書室を少し改造してみてもどうだろうか。雰囲気を変えることによって、利用者数の増大にもつながるだろう。娯楽施設の少なく、学校帰りや仕事のない日にゆっくりする場所がない伊仙町では尚更、図書室を人が集まりやすい、ゆっくりくつろげる空間にすることが必要だろう。

(5) 地域に即した資料の提供

伊仙町はさとうきびを主な生業としている町である。その地域性を背景にし、「農業系」専門書を取り入れてみてはどうだろうか。現在伊仙町は認定農家90名を目標にしている。⁹認定農家の一番のメリットは農業経営の改善を国や県、市町村や様々な機関、団体が支援してくれる点なのだが、同時に農業経営なる専門書を置くことは有意義な事だと感じる。『ベストセラーだけ取り入れることが図書館の役目なのか』(NHK放送)によると、神奈川県立川崎図書館は「地域性」を生かした図書館づくりに取り組んでいるという。川崎と言えば「工場地帯」である。そうした専門書を取り入れたことによって、図書館利用者の増大にもつながったという。また、千葉県浦安市立図書館では「大人のための図書館」というコンセプトを下に、ビジネスマン向けの書籍に力を入れているという。この背景には利用者の変化があるのだが、1983年に子どもと大人の利用者の比は同じであった。しかし、1999年になると2対8と大人の利用者の比が大きくなった。それにはサラリーマンや自営業の住民が多いという背景が影響している。そこで浦安市は「ビジネス支援」を名目にビジネス書の増大に力を入れた。テレビの中で利用者の声を聞く場面があったのだが、ビジネス用のレポート、仕様書、ビジネス用の本を司書職員に相談しながら、利用できるの、大いに仕事に役立っているという事だった。地域に合わせて、図書館の方向性を考える事はその地域活性化にもつながるだろう。

そこで、伊仙町も「農業支援」のために、農業系の本を取り入れてみてはどうだろうか。その際、注意しなければいけないのは「実施に対してどれだけの効果が期待できるか」という事なのだが、実際、2000年度国政調査によると、伊仙町は徳之島三町の中で第一次産業、なかでも農業に従事している町民は多い。また伊仙町就業者3169人中、第一次産業1230人と農業就業者の占める割合は半数近い。伊仙町の経済は、農業の力が大きいという事を考えてみても、そういった資料に力をいれる事は必要だと考える。

第二節 図書室外からの視点

(1) 図書ボランティアの養成

先述したが現在、伊仙町では元水道局の方が図書事務にあたっている。そこで、ボランティアを募集し、伊仙町の図書環境を良くする為に活動してもらおうのだ。伊仙町には図書館がないのにも関わらず2002年度施政方針に図書関係の事が書かれていないのに加え、伊仙町には「図書館を作ろう」という風潮が弱いと感じる。今まであまり図書環境についての話し合いがなされてこなかったというわけだ。この図書ボランティアを機に、多くの伊仙町民が図書環境について考え、何が必要かを考え、話し合う機会が増えるものと考え。図書ボランティアを募集し、彼らと司書、行政が協力し、切磋琢磨し

⁹伊仙町役場経済課発行「経済課便り」による(2002年8月号)

合うことによって、伊仙町の図書環境は良くなると確信する。

(2) 読書グループの育成

現在、伊仙町で活発に活動されている読書グループとして「若葉かおる会」が挙げられる。彼らの活動を更に盛り上げるために行政側、図書室が協力することが必要だろう。かおる会のメンバーは約10名ほどであるが、社会人、子育てに忙しい人など他にも様々である。活動日としては月一回である。若葉かおる会のある会員に話を聞いたので以下に要約し抜粋する。

「自分たちの好きな事だからできる。また月一回というペースがベストだ。これが週一回となると皆、義務観念に捕われてしまい、嫌悪感を抱くようになるだろう。自分達の活動が、本を必要としている子供たちがいるのだ、という裏付け程度になってくれれば良い。それがひいては行政へのアピールになればいいな、と感じている」¹⁰

以上の様に活動はボランティアという事もありマイペースに好きな事をやっているからこそできると感じた。行政や図書室側はボランティア活動を奨励すべく、経済的な面や場所、催し物の提案などサポートする必要があるだろう。

(3) 生涯学習の子育て講座の取り込み

(1) とも関係があるが、行政、図書室側と若葉かおる会が、現在中央公民館で行っている生涯学習講座の中の「子育て講座」と連携を組んではどうだろうか。母親への「読み聞かせ」の重要性を啓蒙できる事はもちろん、そこから本の需要は増えるだろう。すると伊仙町の図書館建設へのアプローチにつながるであろう。子育て講座を開講されている松田氏¹¹にお話を聞くことができたのだが、彼女は自分の開いている塾に書棚を置き、無料で本を貸し出すなど、教育に大変関心がある方だった。「まだおしゃべりのできない子は親のフィルターを通してしか外の世界を知る事ができない」と言う松田さんだったが、教育に熱心で、子どもへの読み聞かせに関心のある熱意のある方を取り込むことは、つまり熱意のある人材、グループを活用していく事が今後の伊仙町にとって必要であろう。

図表 2 - 2 資料『奄美の読書施設（平成13年度 鹿児島県立図書館奄美分館）』を参考に著者作成

市町村名	蔵書冊数(冊)	1人当蔵書冊数(冊)	住民1人当貸出冊数(冊)
天城町	46,351	6,30	4,42
徳之島町	36,294	2,80	3,63

¹⁰ 読書グループ若葉かおる会会員への2002年8月28日のインタビューから。

¹¹ 伊仙町立公民館で子育て生涯学習講座を開講している松田氏への2002年8月28日のインタビューから。

伊仙町	9 , 3 7 4	1 , 2 1	0 , 2 2
喜界町	5 7 , 4 4 7	6 , 2 6	4、2 7
与論町	7 5 , 7 3 2	1 2 , 2 4	9 , 2 8

第三章 他市町村での試み

第一節 「むささびの会」 - 様々なアクターとの協力、支援体制 -

栃木県塩原町立図書館を中心に活動しているグループである。主な活動内容は本、紙芝居の読み聞かせ、工作会、各自担当校での読み聞かせ（朝の十分を利用している）。他の活動としては、乳幼児検診においての読み聞かせ、「ゆっくりセンター」での読み聞かせがある。前者の方は塩原町役場保健福祉課からの依頼によりされている。母親に働きかけることによって、本の大切さ、親と子の触れ合いの大切さを伝えている。発足した背景としては町の生涯学習「読み聞かせ講座」の受講生が主となって七、八年前に発足した。

その他、今年の二月に学校の先生からの依頼で、塩原町の伝統民謡のCDROMを作った。また直接生の声で子供達に聞かせたいという先生方の依頼により、学校に出向き、読み聞かせを行った。七、八年も長く続くのは、あまり活動内容を広げすぎず、マイペースにやってきたからだそうだ。会員の方は皆ボランティアで、肩肘はらずに、変に義務感にとらわれなかったから長続きをしたそうだ。むささびの会へのインタビューを通して感じた事は「ボランティアなので、肩肘張らないで楽しくやる事が重要だ」という事だ。これは私がインタビューを行ったグループ全てに共通していた事だが、「マイペース」がボランティアグループにとって一番大切な姿勢だと感じた。彼らは学校側、行政側からの要請により様々な事業を行っていることは先に述べた。また、彼らは塩原町役場保健福祉課からの依頼で、保健センターで読み聞かせ、ブックスタートを行っている。彼らは読み聞かせを行う際、様々なアクターと積極的に協力し合っている。ボランティアといえども、町の様々な協力、要請があってより良い活動になる。¹²

第二節 「図書館子ども会」 - 町の人材を生かす方法

高橋みゆきさんを中心に活動されているグループである。発足して七年が経つ。元県立図書館長が図書ボランティアを募集し、その中でグループを設立させた。活動日としては毎月第二日曜日である。その活動内容としては「本、紙芝居の読み聞かせ」「工作会」などがある。私が取材に伺った日（2002年11月10日）は偶然にも町民際が行われていた。図書館子ども会もこの日はじめて出し物をするということで同伴させてもらった。以下にそこから感じたことを書こうと思う。

図書館子どもの会では、「それぞれ自分の個性、得意分野を生かし、ボランティアされている。自分の持ち味を十分に生かしている」ということだった。保育園で保母さんをされている方は、本の読み聞かせ、折り紙作り、アートバルーン（風船を使い、犬など様々な

¹² 「むささびの会」会員への2002年11月2日のインタビューから。

ものを作る遊び方)が得意な方はそれを子ども達に教える。そのように自分の好きな事を通して子ども達に伝授する事はとても大切な事だと感じた。

また、このグループで中心になって活動されている高橋さんは現上河内町町議会議員である。彼女へのインタビューによると、「住民が思っている事、考えている事は視察、見学のみでは分からない。実際、このように生の現場に入って初めて、住民の意見や考えは分かる」と言っていた。実際、彼女は今、保健センター内に「ブックスタートコーナー」を設置することを次回の議会で発表するとのことだった。彼女の意図としては乳幼児検診を待つ母親に「本、親子の触れ合いの大切さ」を働きかけたいという事だ。(これは先の塩原町「むささびの会」では既に取り組まれている。)

行政職員が、町の為にボランティアとして住民の中に入っていき事は稀なケースであろう。伊仙町の行政側に欠けていることだと私は感じる。町民の図書館建設への要請が以前からあり、また行政側も「図書館は必要だ」と主張しながらも、実際は図書館建設にあまり関心がないと感じる。先の図書館担当の伊仙町役場職員にお聞きした事だが、現在伊仙町は「町営住宅建設が早急な課題である」と言っていた。図書館はその前から要請されていたことであり、建設不可能にしても「図書環境充実」が先決なのではないか。住民にも図書館、図書環境のアンケートを取り、それについて町民と行政の間で話し合いを持つべきだと考える。

また、図書館子ども会のように町の人材をもっと生かすべく、伊仙町の行政も「人材活用」するべきだと感じる。「自分の持ち味、得意分野を生かしたい」とは誰でも思うことだ。伊仙町に眠っている人材は多くいるだろう。それを生かさぬ術はない。そこで「図書ボランティア」の募集をかけてみてはどうか。町民それぞれの意見やアイデアを生かせば、伊仙町の図書環境は今よりはるかに良いものになるであろう。¹³

第三節 「関東子どもの本を語り合う会」 - 学校区での活動 -

わずか数人というメンバーで、4年前頃から活動されているグループである。小学校、地域からの要請の下、学校図書室に専門の司書がない、また魅力ある本がないという疑問を抱き、学校側からの依頼もあり、彼女らの活動は始まった。毎週木曜日に小学校の朝の時間を使い、読み聞かせを行っている。本は主に宇都宮市東図書館で借りてくるのだが、各自本を寄せ集め、どの本がいいか、読み方の練習などもされている。メンバーの方は皆一様に、「義務感でやると楽しくない。好きだからこそ長く続く」と言っていた。グループにはこのように学校区を中心に活動しているところもある。というよりもむしろ最近では国の「読書活動推進運動」によってこういった学校区で活動されるグループは増えてきていると言える。

¹³ 「図書館子ども会」会員高橋美幸氏への2002年11月11日のインタビューから。

このグループはメンバーが全員子育てを終えたという主婦中心のグループである。グループに参加している動機としては「楽しいから」の他に「自分の子どもにできなかったので、せめてもの罪滅ぼしにやっている」という回答もあった。読み聞かせグループに子育てを経験された方を取り組むことも必要となってくるだろう。¹⁴

¹⁴「関東子どもの本を語り合う会」会員松田氏への2002年10月18日のインタビューから。

おわりに

以上、伊仙町を中心に現在の図書環境を論じてきたが、今まで述べてきたように、今の伊仙町に図書館建設というハード面での期待はできないのが事実であった。それはこれまでの道路建設のみに重点を置いてきた町政、元町立診療所の三千万円の赤字、補助金が下りない現在の情勢という様々な原因があったわけだが、それは伊仙町行政があまり「図書環境」に関心を寄せてこなかったとも言える。伊仙町行政は文化的教育の大切さをもっと知る必要があると感じる。行政のみで図書館問題を考えるのではなく、伊仙町民にも耳を傾けなければならない時がきている。図書ボランティアや様々な町民どうしの協力のもと、建設的な話し合いをすれば、伊仙町の図書環境は今よりはるかに充実したものになるだろう。これを通して、伊仙町の行政への住民参加も増えてくるに違いない。

また、伊仙町民は図書館が建設される日をただ待つのではなく、自ら動く姿勢が必要であろう。町民自身「お役所任せ」から脱却しなければいけない。誰かがやってくれるのを待つだけでは何も変わらないだろう。私はこの論文で、1人よがりな提案をしてきたかもしれない。様々な行政機関にその提案をして、質問をしても、帰ってくる答えは全て「不可能です」の一言だった。移動図書館者の協力巡回などできない背景として伊仙町の財政問題など様々な事があるが、事実、伊仙町は徳之島三町の中でもっと徴税率が低いという。他二町が自主財源などで図書館を建てているのに、伊仙町が建設できないのはそれが大きいとも考える。実際、行政職員の方も「自主財源がないから図書館建設は無理だ」と言う人もいた。行政側にはもっと「町民の側に立った行政サービス」というものを考えてもらいたいと同時に、行政の公のサービスを考える姿勢と町民の公のサービスへの無関心さを無くすためには話し合いをする事が急務だと感じる。ただ、図書館という箱モノを作るのではない。町民同士が知恵を出し合い、伊仙町ならではの図書環境というものを作っていく事が望ましいだろう。

あとがき

論文を仕上げるまでに約一年かかったわけだが、まずはじめに、行政学研究室の中村祐司先生、そして卒論報告会に出席し、意見を頂いた行政学研究室の皆に御礼を申し上げたいと思う。卒業論文とは4年間の集大成であるわけだが、私の論文はそう言い切れる自信がない。だが、4年間の中で最も力を入れ、調査をした論文であることには間違いない。卒論の調査には様々な所へ出向いた。私の生まれ故郷である鹿児島県徳之島の徳之島町、伊仙町、天城町、それぞれの行政関係者そして、図書館関係者の方々には大変お世話になった。彼、彼女らのおかげで卒論を完成させることができたことはもちろん、彼らから更に大きな事も学ぶことができた。この場をお借りして御礼申し上げます。また栃木県内で活動されている図書館子ども会をはじめ様々なグループにお世話になった。大変お忙しい中、調査に協力してくださった皆様に大変感謝しています。

卒論も終え、後は卒業するのみとなったが、残りの学生生活を有意義に過ごしたいと思う。この4年間を振り返ると、様々なことがあった。一番の思い出はやはり何と言っても「ジョイント合宿」だ。6大学が集まったの討論会は本当に勉強になったと思う。就職活動やこれから社会人になるためのステップになったと言っても過言ではない。ジョイントで、少しは身に付いたと思われる勇気を武器、これからも頑張っていこう思う。

最後に、中村祐司先生そして行政学研究室の皆、演習生の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

清水文香

参考文献

- ・伊仙町議会「平成14年度一般会計予算」『伊仙町議会だより』（伊仙町議会、2002年）
- ・伊仙町役場 - 企画課「特集市町村合併について」『広報いせん』（伊仙町役場 企画課、2002年）
- ・宇都宮市「広域利用に関する協定書」『図書館概要』（宇都宮市、2002年）pp63-65.
- ・鹿児島県立図書館奄美分館 鹿児島県図書館協会奄美支部『奄美の読書施設』（鹿児島県立図書館奄美分館 鹿児島県図書館協会奄美支部、2001年）
- ・塩見昇・山口源治郎『図書館法と現代の図書館』（日本図書館協会、2001年）
- ・社会貢献支援財団（http://www.fesco.or.jp/winner_h13_08.html）
- ・社団法人日本図書館協会「国と県の図書館政策」『図書館はいま』（社団法人日本図書館協会、1992年）p.64.
- ・図書館情報大学「知の銀河系―本と情報の世界」（図書館情報大学、1998年）p139-140.
- ・文部省『地域と施設を超えて』（文部省、1997年）
- ・インタビューをした方々

鹿児島県大島郡伊仙町助役上木久市氏（以下敬称略）

鹿児島県大島郡伊仙町町長大久保明

伊仙町教育委員会社会福祉課課長時孝

栃木県上河内町議会教育民生常任副委員長高橋美幸（兼図書館子ども会会員）

鹿児島県大島郡伊仙町立公民館付属図書室長前田忠男

栃木子どもの本連絡会会員松田愛子